

土木の魅力探求「話す」「聞く」「考える」

土木遺産の価値について考える

ばんせいだいろ
万世大路の維持管理・活用の取り組み事例から

学生委員がチームを組み、それぞれの興味を持っていることを探究した。本企画は3部構成になっており、「話す」では、担当が興味を持った理由や取材前の気持ちを率直に伝え、「聞く」では取材を通して疑問に思ったことを当事者に伺い、「考える」では取材後に学んだことを踏まえ感じたことをチームで共有した。今回は土木遺産の価値について、土木遺産を維持管理している方の視点から深掘りする。

話す

Discussion

上田——皆さんの地域にある土木遺産に対する印象などについて話していきたいのですが、皆さんどうですか。

海崎——私が土木遺産に関心を持つたきっかけは、大学の授業で土木遺産の選定についての話を聞いたことです。土木遺産について調べてみたときに、有名な構造物もあれば、まちの中にとけこんでいるものもあつ

て、幅広いものが土木遺産になっていると感じました。土木の人は興味があるけどそうじゃない人からは知られているのかなと疑問に思います。

松原——大学に入ってから土木遺産という存在を知って、自分が土木分野に飛び込まないと知らないことだったと思います。土木遺産は、普段使っている構造物が多いので、どいういう価値のあるものか気にすることは無いと思います。また、今は使われていない構造物も土木遺産とし

て認定されてい

て、認知されていないことも多いように感じます。価値のある場所があるのに、あまり表に出ていないように感じるのももったいないなと思います。

上田——正直、自分自身は土木遺産を認識していませんでした。今は使われていないものの場合、土木遺産として形だけ残っているものという存在になってしまっていて、あまり人に認知されるものではないと感じます。地域の人にとっては、普段から触れるものではないため認知することや、活用することがないのかもしれない。だから、実際に土木遺産の保存活動をしている人に話を聞いて地域と土木遺産の関係について深掘りしてみたいですね。

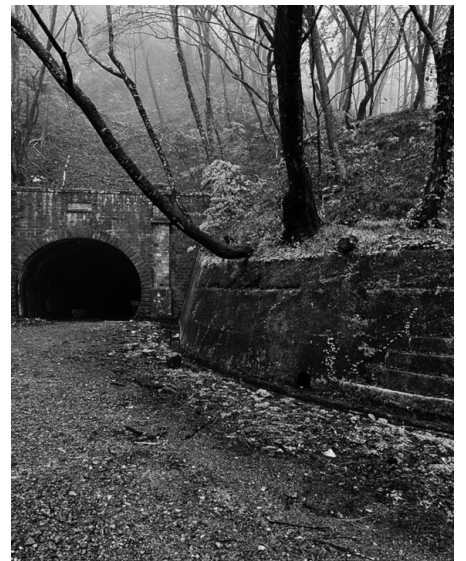


写真1 万世大路の様子

聞く

Interview

「取材協力者」

岡部 達也氏

福島市万世大路を守る会

森崎 英五朗氏

正会員 寿建設(株)

土木遺産に対して地域の人々がどのように関わり、どのような意識を向けているのかという疑問がある。そこで明治期に山形・福島両県を結ぶ物流の大動脈として整備・維持管理された「万世大路」を事例として、『土木遺産の維持管理や活用の取り組み』と『住民と土木遺産』の二つの観点から、岡部達也氏(福島市万世大路を守る会)、森崎英五朗氏(寿建設(株))にお話を伺った。

万世大路の維持管理や活用を始めたきっかけ

——万世大路の活動を始めたきっかけについて教えてください。

岡部——私は元・福島市職員（土木職）で、2019年の3月末に退職し、その後2024年3月まで5年間、福島市土地改良区で事務局長を務めました。在職中の2014年から万世大路の維持補修などの活動を行っています。福島市では土木遺産の認定に向けて、歴史的遺産に触れることを目的とし、1996年、97年の春と秋に市民の方々と一緒に散策を行いました。万世大路は、明治時代の国家プロジェクトで整備され、昭和初期に改修されてきましたが、1966（昭和41）年に今の国道13号が開通して、役目を終えました。新たに大規模な道路ができて、もそれまでに使われていた道路が中規模的な道路として残ることはありませんが、万世大路は時代の変遷とともに役目が終わり、廃道となってしまいました。所期の役目が終わっても、先人の偉業を後世に遺（のこ）したいというところからです。

万世大路の維持管理における活動の形や課題について

——維持管理などの活動を行っている現在の体制について教えてください。

岡部——今、実働部隊としては、数名で活動しています。ボランティアで自費活動を理念としています。

——万世大路を維持管理、活用するにあたり、活動を数人のグループで実施されているのですね。何が課題だと思いますか。

岡部——活動が将来継続されるかという点です。

——若い人が参加する機会はありませんか。また、必要な活動人数についてはどうお考えでしょうか。

岡部——現状、若い人たちが参加するといった機会はありません。活動として、私一人で行く時もありますし、最低二人いれば十分です。組織というものは、立ち上げた時から劣化が始まります。いろいろな経験からすると、人数がたくさんいれればいいというものではなく、組織は巨大化させないということを大切にしています。

——万世大路の活動を今後どのように進めていくお考えですか。

岡部——私たちは、「スローPR」をモットーにしています。「スローPR」とは造語で、過剰・過大なPRをしないということであり、このモットーを変えずに活動を続けていきたいと思っています。一過性になってしまわないように、自主的に活動をし、無理せず継続性がある活動をしていきたいと考えています。

——活動を継続的なものにしていくために、個人や組織の活動に必要なことは何でしょうか。

岡部——私たちが年齢を重ね、今後活動できる年数も10年程度でしょう。その期間が課題と捉えています。活動を継続させていくためには組織の拡充が考えられますが、市民参加を募り組織を大きくしても立ち行かなくなることは世の常です。先ほどの、組織はすぐに劣化が始まるという課題に対しては、寿建設の森崎社長と協力して対策しようと考えています。また、活動を継続させていく課題に対しては、市内建設業組織による参画の可能性があると考えています。その理由は組織として社会貢

献の場を求めているからです。具体的には福島市の建設事業者である寿建設の森崎社長にご協力いただき、建設業の組織内に地域資源保全部などを設立してもらい、そこから活動を展開していただきたいと考えています。

森崎——当社では現在使われている国道の維持管理やトンネル、橋梁きょうりょうのメンテナンス工事も担当しています。が、地域資源の保存という意味で、廃線とか廃道になってしまったインフラの維持管理の仕方をどうしていくかを今後検討できるのなら協力したいと思っています。土木遺産を生かしていくには管理者が明確な方針を持つていなくてはならないと感じています。後世に残していくためには、岡部さんたちが活動できなくなったときに、その管理方法をどう継承していくのが大事になりそうです。

道の駅での社会実験の取り組み

——2018年には「道の駅ふくしま」で万世大路に関する写真展やツアーイベントの開催、社会実験が行われたとお聞きました。これらの

取り組みについて教えてください。

岡部——「道の駅ふくしま」の整備は副代表の後輩が担当した経緯があり、社会実験は行政が主導して、道の駅を活用した地域内観光の促進による地域活性化を目的として行われています。そこで、広域周遊ルートとして万世大路の魅力を伝える活動が行われています。

——万世大路の魅力を伝えるという点で社会実験の影響があると思いますが、実施することの難しさはどういった点にあると思いますか。

岡部——社会実験は段取りが大変です。労力対効果があまり見込めないのではないのでしょうか。大体実験で終わってしまうことが多いです。

森崎——実験で終わるのは残念ですね。取り組み方が熱意を持って継続すれば形になっていくかもしれないですが、どうしても行政の方は数年で異動してしまうので思いを継続するのが難しい事情がありますよね。岡部さんが過剰に社会実験のようなことをやらないという考えを持つ理由は、やはり行政側で働いてきた経験からこそではないかと思えます。

活動における山形側と福島側の関わり方について

——「万世大路研究会」という取り組みも行われていますね。どのような人たちが活動をしていますか。

岡部——土木遺産認定に向け組織され、コンサルタント・建設業関係の人や、行政の人たちが携わっています。研究会は福島・山形の人々が主体です。山形の人からすると、万世大路を通じて東京方面に向かうため、福島の人よりも重要性を感じています。そのため、山形での活動が盛んになっています。

——万世大路の維持管理や活用において、米沢（山形側）ではどのような活動が行われていますか。

岡部——米沢には「万世大路を歩く会」の主催者「歴史の道土木遺産萬世大路保存会」があります。山形側では行政が年1回草刈りをしており、管理者が明確になっていると聞き及んでいます。

現在、県境の栗子^{ずいどう}隧道には落盤が2カ所あり、トンネルの高さの3倍ほどの穴が開いてしまっています。落盤箇所は山形側なので、山形側に

対応をお願いしたいと思っっています。実際に、落盤を解消するなどになった際に、そこまでのアクセス道路が通れないと行けないため、その維持補修の意味合いもあります。

万世大路と

近隣住民との関わり

——「万世大路を歩く会」に参加する方々はどういう人たちですか。

岡部——山形の行政関係者と保存会のメンバー、福島市の関係者が集まります。かつては、福島側と山形側の両方から万世大路を歩いていましたが、現在では規模を縮小しています。

万世大路に対しての山形側と福島側の活動意欲には温度差があります。

——以前は、万世大路と住民の方たちのつながりというようなのはあったのでしょうか。

岡部——万世大路の沿線に位置していた現在では廃村となっている大滝集落は、かつて宿場でした。出身者の方による「大滝会」という組織がありますが、高齢化により活動が縮小しています。以前は花見に始まり環境整備や芋煮会、忘年会など年中行事を展開していました。

——福島市の他地区とのつながりはありますか。

岡部——ないですね。今後についてもその必要性は感じていません。ただ、市学習センター主催散策会の案内役など広報に務めています。

——地域の人が携わることだけでは継続にならないと感じられているのでしょうか。

岡部——福島側の地元の人にとっては、もともとあまり大きな恩恵を受けたわけではないのでその考えが薄いと感じています。

——活動方針である「後世に遺す」ことに関して、道として遺すことや、人に関わってもらうこと、後世にも保存してほしいという点で、一番の目的は何ですか。

岡部——ハード整備だけでなく、土木遺産や地域のシンボルとしてソフト面での意味でも遺していくという考えはあります。

——岡部さんが保全活動できなくなった道が残らなくなってしまうのではと思いますが、その点についてはどうお考えでしょうか。

岡部——建設業協会などの建設業界の方たちといった民間の力を借りて

保全活動を継続していけたらと考え
ています。ただ、継続性を生むには
受動的ではなく自発的にやってもら
わなければなりません。だからこそ、
自分たちから手を挙げてもらう必要
があると思います。

——若い人たちは、万世大路に対し
て興味や関心はありませんか。

岡部——若い人は万世大路のことに
ついてはほぼ知らないのではないで
しょうか。高齢者の方には、万世大
路を通った経験のある方もいます。
また、万世大路に県内外を問わずオ
フロードバイクや四駆車で来てくだ
さる方、県外から沢登りで来てくだ
さる方も多いです。話しかけてくれ
た方には説明するように心がけてい
ます。

——建設業協会などで保存の部会を
立ち上げ、若い人たちが関われば、
継続して活動できるのではないかと
思うのですがどうでしょうか。

森崎——労働時間規制があるので日
中は会社内での通常業務があつて、
かつ保存の活動をするのはなかなか
厳しいと考えます。若い人たちに万
世大路のことに関わってもらおうとい
うならば、例えば学生を社会活動と

して巻き込みながら活動を展開する
計画をするような方法もあるのでは
ないでしょうか。建設業には他にも
課題案件が多く、通常業務を超えた
活動になかなか時間が取れません。
それでも知恵を出して、支援できる
ことはやろうと考えています。

(2024年4月24日(水) 寿建設(株)
にて)

(聞き手：上田・海崎・松原)

考える Analysis

上田——万世大路の管理や活用につ
いてのお話を聞いて、どう感じまし
たか。

海崎——非常に熱心に取り組まれて
いることに感銘を受けました。多分、
土木遺産だからというよりも「すご
く万世大路が好きでやっている」と
いう印象を受けました。それだけ魅
力のあるものだからもっともっと地
元の人にも知られていいんじゃない
かと思いました。

松原——管理をする上では自分自身
の興味や関心、自分がやりたいと思
わないと続かないと思います。土木

遺産に認定され、住民の人がどう思
うかというのは人それぞれかなと思
いますが、私も万世大路を多くの人
に知ってもらいたいなと思いました。
私たち自身がもっと土木遺産につ
いて知り、どう守っていくかという
ところに携われば、他の人にも参加し
てもらえるんじゃないかと思っています。

上田——土木遺産や地域のシンボル
的な存在に対しての関心や、個人と
しての思いがあつてこそその維持管理
なのだと感じました。無理してでも
他の人に携わってもらおうという考
えではなく、必ずしも継続しないと
いけないわけじゃないというのが、
面白かったです。たとえば一つの組織
が継続しなくても、民間企業との連
携など、活動そのものを進めること
がとても大切なのですね。どんな
波及していったらいいですか。地域の
人たちにも浸透していけば活動も深
まっていくのかなと思います。

海崎——維持管理や住民の活動と、
土木遺産の価値のつながりという点
に関してはどうですか。

上田——一度利用されなくなつてし
まった道路などのインフラをもう一
度同じように活用するのは困難であ



写真2 岡部氏、森崎氏とともに

り、土木遺産として後世に残してい
くための維持管理や活用の仕方を工
夫するのは重要だと思っています。そ
から土木遺産として遺していくとい
う価値につなげられるのではないで
しょうか。住民の人々の活動への参
加は求めておらず、実際参加してい
ない事実がある一方で、継続性を課題
と感じている点や学生の参加を促す
ことを活動として生かしていくアイ
デアも伺えました。学生の参加を促
すことによつて、若い人々が住民の人
たちと一緒に土木遺産の保存や活用
活動に参加する仕組みづくりにつな
げられるのではないかと感じました。
(学生編集委員：上田晴斗、海崎真穂、
松原帆乃香)